

中観論疏における涅槃經の引用

—その思想的背景—

平 井 俊 榮

目 次

- 一、はじめに—問題の所在—
 - (一) プラサンナパダーと中論疏の引用経論
 - (二) 吉蔵涅槃經研究の背景
- 二、吉蔵における涅槃經研究の軌跡と疑点
 - (一) 涅槃經の註疏
 - (二) 三論学派の涅槃研究の伝統
- 三、教判よりみた吉蔵の涅槃經観
- 四、中観論疏における涅槃經引用の特徴
 - (一) 依用テキストの問題
 - (二) 涅槃經引用の諸形態
- 五、獅子吼菩薩品と吉蔵の空觀思想
- 六、結 語

一、はじめに—問題の所在—

(一)

ナーガールジュナ (Nāgārjuna 竜樹 ca. 150～ca. 250) の
主著 “Mūlamadhyaṃakā-kārikā” (根本中頌) の諸註釈
書の中、現存唯一のサンスクリット原典 (Ed. by L. de la
Vallée Poussin) であるチャンドラキールティ (Candra-
kīrti 月称 ca. 600～ca. 650) の “Prasanna padā” (淨名句
論) に引用される經典や論書の代表的なものをプサンの索引
に⁽¹⁾限ってその引用回数が多い順にあげると次の如くである。

経 論 名

1. Samādhirāja-sūtra	32
” Saṃyutta notes	”
2. Mahāvastu	27
3. Lankāvatāra-sūtra	25

3.	Kathāvathu notes	25
〃	Bodhisattva bhūmi notes	〃
4.	Aṣṭasāhasrikā prajñā-pāramitā	23
〃	Āṅuttara notes	〃
〃	Majjhima notes	〃
5.	Madhyamakāvātāra	20
6.	Visuddhimagga notes	19
7.	Lalita Vistara sūtra	71
8.	Akuto bhaya notes	15
〃	Atthasālini notes	〃
〃	Nyāyakandali bindu notes	〃
9.	Śataka	14
10.	Dīgha notes	12

ここで引用されている主要な経論は、各種 Nikāya の Notes をはじめ二次的な註釈書類を除けば、Samādhirāja sūtra 月燈三昧経、Mahāvastu 大事、Lankāvātāra sūtra 楞伽経、Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā 八千頌般若小品般若、Madhyamakāvātāra 入中観論（漢訳なし）、Lalita Vistara sūtra 普曜経、Śataka 百論等である。この中で比較的中國や日本の仏教に影響を与えたものは、わずかに楞伽経や百論が見られるだけである。⁽²⁾これに対して同じ七世紀頃、中國において現存最古の「根本中頌」の註釈書であるピ

ンガラ (Pingala 青目) 註羅什訳「中論」に註疏した吉蔵 (五四九—六二三) の「中観論疏」の中に見られる引用経論の主なものとその回数は次の如くである。⁽³⁾

引用回数	名 論 經
125	1. 大般涅槃經
110	2. 大智度論
70	3. 大品般若經 (摩訶般若波羅蜜多經)
50	4. 成実論
44	5. 維摩經
43	6. 法華經
31	7. 阿毘曇毘婆沙論
29	8. 雜阿毘曇心論
20	9. 百論
19	10. 撰大乘論積 (真諦訳)

この両者の引用回数が多い順に十位までの中で両者に共通なものは「百論」一つだけである。中観論疏には他に「入楞伽経」十卷本（菩提流支訳）が十四回、「地持論」十卷（菩薩地持経、曇無讖訳）が七回引用せられていて、それぞれプラサンパダーの “Lankāvātāra sūtra” “Bodhi sattva bhūmi notes” と共通しているが、プラサンパダーでは索引の頻度から推しても比較的頻繁に引用せられると思われるのに対して、中観論疏では引用回数はともかく、全体からすればその扱いに大きな相違が見られる。この現存するサンクリット・漢訳の二大「中論」註釈書における引用経典の

違いは、インドと中国における中論研究の傾向の違いを示す一つの目安であるが、特に注目されることは、共に上位をしめるプラサンナパダーの月燈三昧経の重用と、中観論疏における大乘の涅槃経と大智度論の多用である。中観論疏には月燈三昧経は一度も引かれていないし、プラサンナパダーにもまた涅槃経は一度もでない⁽⁵⁾。

吉蔵の中観論疏にこの大乘涅槃経の引用が圧倒的に多い点については、すでに法政大学の泰本融教授によって指摘せられ、諸経論引用回数⁽⁶⁾の多寡が吉蔵の思想、とくにその中論解釈の特異性を検討する一つの目安となるであろうことが示唆せられている。また安井広済博士は吉蔵の二諦説が空仮相即の立場を取る点で竜樹中観の二諦説を超えた新しい展開であり、それは涅槃経を思想的依憑としてなされたものであることを、インドのバーヴァヴィヴェカ (Bhāvaviveka 清弁 ca. 490 - ca. 570) の中論註 (“Prajñāpradīpa-mūlānadhyanaka-vṛtti”) や前述のチャンドラキールティの“Prasannapada”との比較対決により明らかにせられている⁽⁷⁾。これらの成果は、吉蔵教学の本質的解明にとって誠に貴重な指針を与えるものである。筆者もかつて吉蔵における△不空▽という観念がインドの中論註や羅什訳「中論」にもない独特の展開であり、それが涅槃経に基づく思想であることを論証したが、⁽⁸⁾このような吉蔵著作における涅槃経の影響

という問題は中観論疏にのみ見られる特有な現象ではなくて、たとえば「法華義疏」についても、吉蔵がもつとも頻繁に引用し経典解釈の資料典拠としたものは主として「涅槃経」と「智度論」であったし、また「勝鬘宝窟」においては、吉蔵自ら「古今を摺拾し経論を搜検して此の書を作った」⁽⁹⁾ (大正・三七・一・下) と自負するだけあって、実におびただしい数の各種経典の引用が見られるが、なかならず涅槃経の五十五回と智度論の二十三回に及ぶ引用がその双壁をなしている⁽¹⁰⁾。したがって、吉蔵教学の形成を考える場合、この涅槃経と大智度論の依用が主要な基盤をなしていることは見逃すことのできない問題である。このうち大智度論については中・百・十二門論と並ぶ四論の一環として、また大品般若の註解書として彼の三論教学の中核に位置すべきはきわめて当然であるが、涅槃経については彼の空観思想の立場からすれば、常に智度論をしのいでいるという点、しかも、これが単なる経証的な権威として引かれるのに留らず、その思想構造の枠組みを決定づけるという役割を演じている点に、吉蔵教学のインドの中観派には見られない独特の展開が存するのである。この小論においては、吉蔵教学形成の背景をなしていると考えられる涅槃経と大智度論の中、後者については北土の大智度論師の伝承等の問題とからめて後日改めてこ

れを論ずることとして、前者についてその代表的名著である「中觀論疏」における引用をめぐって、その思想的背景について若干の考察を試みたいと思う。

(二)

ところで、この吉藏の著作における涅槃經引用の圧倒的多数は何に起因しているのか、そのことが先ず究明せられなければならぬが、この問題は歴史的には江南における涅槃學派を中心とした涅槃經の流布と研究の盛行をその背景とするもので、大きくは南地・北地を問わず、中国仏教史における涅槃經の影響そのものを前提としてこれを問題としなければならぬ性質のものである。たとえば、梁の三大法師と称される成実學者の開善寺智藏(四五八―五二二)、光宅寺法雲(四六七―五二九)、莊嚴寺僧旻(四六七―五二七)等においても涅槃經研究の事實は顯著であり、⁽¹¹⁾同時代人の淨影寺慧遠(五二三―五九二)や天台大師智顛(五三八―五九七)にあつてもまた同様であること⁽¹²⁾を思えば、涅槃學派に限らず、この涅槃經研究は当時の一般的傾向であつたことがうかがわれるのである。これは涅槃經が經典成立史の上からはインド中期大乘經典の代表的な傑作であり、教理的には大乘仏教の完成を目指したものととして、当時の中国南北朝時代から澎湃として起つた大乘思想⁽¹³⁾の研究という時流に乗じたものである。⁽¹³⁾南地においてはこれが特に梁代を中心とする涅槃學派

の盛行とともに、涅槃經研究に集約的に現象しているのである。しかも、吉藏の教學は江南に勢威を振つた梁の三大法師の教學の超克という形をとつて成立したものである。そこに彼の涅槃經研究が一つの歴史的要請として不可欠のものであつたことが理解されるのである。しかし、さらにより重要なことは、羅什の伝訳に始まる般若三論學の大成者としての吉藏を考えたとき、中国に伝わつた般若三論の思想というものが、涅槃經の思想と融即されることによつてはじめて体系化されたという点である。吉藏の著作に見られる涅槃經の多数引用といふことが、單なる時代の一般的傾向として以上に問題となるのはこの点においてであつて、そこに私達が中国仏教における般若空觀思想の體質といふものを考える端緒が存するのであるが、このような視点からすれば、現実肯定的な面がきわめて強い中国の社會に受容された般若空觀思想に、その必然的な展開として涅槃經の思想と結合せざるを得なかつた素因がもともあつたのであり、吉藏における兩者の融合は文字通りその歴史的な所産であつたともいえるのである。

思想・歴史的にはこのような背景の下に吉藏と涅槃經との結びつきを設定できるのであるが、實際に吉藏における涅槃經の軌跡をたどってみると、少なくともそこに二つの疑点⁽¹⁴⁾が呈せられていたことを知るのである。⁽¹⁴⁾その第一は吉藏に涅槃

槃經に関する著述が少ないということ、第二に僧詮以来三論学派においては涅槃經講説の伝統が不十分であったのではないかとする二点である。

二、吉蔵における涅槃研究の軌跡と疑点

(一)

第一の疑点は、中国仏教者の中でもっとも多く著述を残し、当時読まれた代表的經典についてはほとんどすべてその註疏を著わしている吉蔵にあって、その思想的な依憑とまで目されるこの涅槃經については、わずかに「涅槃經遊意」一卷（大正・三八・二三〇 No. 1768）の小部のものが現存するだけであって、これはたとえば、法華經に関しては「玄論」「義疏」「論疏」「統略」「遊意」と大部の著述が五部も現存しているのに比べて、はなはだ対照的である。道宣（五九六―六六七）も吉蔵については、

三論を講ずること一百余遍、法華は三百余遍、大品、智論、華嚴、維摩等は各數十遍なり。並びに玄疏を著わし、盛んに世に流る。（「統伝」卷・十一・大正・五〇・五一四・下）

というのみで、涅槃經に関しては何も記録していない。したがってこのような疑念の生ずるのもけだし当然である。しかし、現存のものはなるほど涅槃經遊意一卷という小部のも

の一部に過ぎないが、經錄によれば他に「涅槃經疏」十四卷若しくは二十卷の撰述があったことが知られる。すなわち、

1、奈良朝現在一切經疏目錄（石田茂作「写經より見たる奈良朝仏教の研究」附録一二頁）

涅槃經疏 吉蔵 一四卷

2、三論宗章疏（元興寺安遠律師）（大正・五五・一一三・七・中）

涅槃義疏 二十卷 吉蔵述

3、東域伝燈目錄（興福寺沙門永超集）（大正・五五・一一四・上）

大般涅槃經疏 二十卷 吉蔵

4、新編諸宗教蔵総録（高麗沙門義天録）（大正・五五・一一六八・上）

大般涅槃經疏 十四卷 吉蔵述

の各記録に見る通りである。また吉蔵自身も自著の中でこの自撰の涅槃經疏に言及している。すなわち、「中観論疏」卷第二末に、

三つには八不偈は即ち涅槃の本有今無の偈なり。偈に云く。本有今無、本無今有なり。三世に法有りては是の処り有ることなし。広く釈すること「涅槃疏」の如し。今は略してこれを弁ず。（大正・四二・二一〇・中）

といって、広釈を涅槃疏に譲っている。日本三論の碩学安澄

(七六三—八一四)はその著「中觀論疏記」の中でこの項に註記して、

広く釈すること涅槃疏の如し、等と言うは、彼の疏の第十卷に云うが如し。(大正・六五・九八・上)

と云って、これが涅槃經疏第十卷に相当することを指摘している。また同じく「勝鬘寶窟」卷上末には、戒に関して、

小乗は犯に随って漸に制す。大乘は未だ犯さざるに頓に制す。小乗の戒は定数あり、十戒より乃至五百なるが如し。

大乘のは不定なり、或は六重、或は八重、二十八輕、或は四十二種、或は十重四十八輕なり。「涅槃疏」の内に具さに其の同異を會す。(大正・三七・二一・下)

とあって、いずれも自撰の涅槃經疏を指していることは明らかである。今日これが散逸して現存藏經の中に収録されていないのは事実であるが、前記中觀論疏記の記述によっても明らかかなように、安澄や玄叡(一八四〇)、珍海(一〇九二—一一五二)、澄禪(一二二七—一三〇七)等の日本三論学者の間では少なくとも一四世紀頃までは傳承され盛んに依用されたことは間違いなく、これらの三論学者の諸註釈書の中からその逸文の相当量を収録することができるのである。⁽¹⁵⁾そして、日本の中世において傳承依用された涅槃疏は一部經録の記載するような十四卷本ではなくて、全二十卷にわたり涅槃經を逐一註解した大部の著述であったことがうかがわれる。

しかも前述したようにこれが吉藏の揚州慧日道場時代の作品と思われる「勝鬘寶窟」⁽¹⁶⁾の中にすでに引用せられていることから推しても、吉藏にとってこの涅槃疏が比較的初期の作品であることが知られる。また現存の涅槃經疏逸文の第十五卷⁽¹⁷⁾に、六神通の問題について、

六通に示現と不示現と有りとは、若し是れ如意通・知他心通・漏尽通ならば此の三は是れ示現なり。若し是れ余の三ならば已に別して記するが如し。

と云って、その説明の一部を他に譲っている箇所が見られるが、この「別記」とは珍海の註記によって「法華玄論」と「義疏」にその相当文が存在することが指摘されているので、⁽¹⁸⁾その成立は勝鬘寶窟以前で、法華玄論や法華義疏以後ということになり、恐らくはこの両者と同じく會稽時代の作品であろうと推定される。吉藏は「法華統略」の卷頭で、法華經に関して、昔會稽に在って此の經の玄文凡そ二十卷を著わし、中ごろ京兆に居して其の要用を録して、裁して七軸となせり。(卅・統・一・一・四三・一)

と云っているが、この會稽時代に著わした法華の玄文凡そ二十卷というのが、玄論と義疏とを指すものとすれば、⁽¹⁹⁾量的にはこれと匹敵する涅槃經の註疏を同じ時期に著わしていたことになる。したがって、著述量としては三論所依の經典である「大品般若」の註釈書も「大品經義疏」(卅・統・一・三

八・一一二)十卷と「小品遊意」(大正・三三・六三・No. 1696)一卷の二部であるから、涅槃經の註釈書だけが、特に少ないということはないのである。

ただし、涅槃經については、その後長安日嚴寺において「遊意」一卷を著わしたに過ぎないのに対して、法華經に関してにはさらに「遊意」「論疏」「統略」と次々に著述を行ない研鑽を深めて行った訳である。この違いは、どう説明すべきであろうか。この点については次のように考えられる。すなわち、一つには吉藏自身の内的理由によるものである。長安時代に書いた法華論疏の初めに彼は、

但し、昔三たび經疏を出すも猶未だ論文を解せず、今具さに之を釈し、經論をして喚然として領すべからしむ。(卅・続・一・一・二・七四・一四九・左上)

と述懐している。つまり、法華の理解が十分に得心の行くものでなかつたという正直な告白である。これが法華に関して次々に講説を行ない、註疏を重ねていった一つの理由であろう。また法華統略では、

余は少くして四論を弘め、末に専ら一乘を習う。(卅・続・一・一・四三・一・一・左上)

といっている。横超慧日博士も吉藏が法華を講究し始めたのは少壮時代を過ぎてからであろうと推定されているが、ここでいっている末年に専修した「一乘」とは、法華、乃至はそ

の全註釈書が長安時代に書かれた「維摩經」⁽²¹⁾を指すのであって、涅槃經についてはむしろ例外的に三論と同じように少壮時代に専ら修学したものであり、すでに吉藏の思想においては十分に血肉化されていたと想定するならば、重ねて註疏を著わすという必要もなかつたであろうし、三論によって法華を釈すという基本方針⁽²²⁾と同じく、前述のように法華解釈の資料典拠の双壁が涅槃經と智度論であつたという事実も首肯されるのである。泰本教授は「中観論疏」における吉藏の諸經論引用態度について、法華經その他の經典についてはこれを比較的正確に引用しているのに対して、涅槃經の場合はほとんど要略・取意または何のことわりもなく多数引用していると指摘しているが、このような引用態度の由つて来る所以といふものも、若くして涅槃經に精通していた結果とみなすことができよう。

(二)

第二に、三論学派において僧詮以来伝統的に涅槃經の講説が不十分であつたといふのは、涅槃經遊意に、南地撰山三論学の始祖・僧朗(撰山大師)の後を継いで撰山を綱領した僧詮について吉藏が、

撰山大師に就いて唯三論及び摩訶般若を講じて涅槃・法華を開かず。諸学士涅槃經を講ぜんことを請う。大師云く、諸人今般若を解す。那んぞ復、儂をして講ぜしむるや。復

重ねて請う。乃ち為に本有今無偈を道いて遂に文を講ぜず。興皇に至って以来、大いに斯の典を弘む。(大正・三八・二三〇・上―中)

といつて、涅槃經講經の事実がなかったことを伝えているためである。僧詮が三論と大品般若の講經に意を用いて他の經を講ずることがなかったことはかなり有名で、このことは「大品般若經義疏」(山・統・一・一・三八・一・九・左上)や後述のように「涅槃經疏」の逸文中にもしばしば散見する。確かに僧詮の般若三論学が純粹であったことは認めるが、僧詮が諸学士の涅槃講經の請に応じなかった理由の一つは、すでに晩年に近く、講經の完了しなかったことを恐れたことによるものである。すなわち、涅槃經疏卷十には、

然も山中法師涅槃經を講せず、諸学士講せんことを請う。師云く。儂若し五年活きることを得と知れば、儂は此の經を講ぜん。今は五年活きることを得ざるを知る。故に此の經を講ぜず。意を究むるを得ざるを恐るればなり。諸士奈何ともすること能わず。但、大品及び三論を熟読す。

(「中観論疏記」卷第三末・大正・六五・九八・上―下)

とあり、この間の事情は前述の大品經義疏卷第一に「無常の年に臨んで諸学士涅槃を講ぜんことを請う」とあるのにも一致する。つまり僧詮において涅槃經の講説が行なわれなかったということは全く僧詮の個人的事由に基づくもので、むしろ

吉蔵の伝えているように、撰山の諸学士の間では涅槃研究の意欲が盛んであり、僧詮にあってもこれを講經しないまでも、涅槃疏卷第十二に、

山中の諸法師止観師に涅槃を講ぜんことを請う。師直ちに第十五卷を取り、この中の文を唱えて無所得の意を商略し、是れ涅槃の正意なることを明せり。

(「三論玄義檢幽集」卷第七・大正・七〇・四八六・上)と述べているように、断片的にもせよ、僧詮が無得正観の立場から涅槃の正意を説示していることから推して、涅槃經について造詣の深かったことがうかがわれるのである。⁽²⁴⁾吉蔵の伝えるこれらの諸事情は、梁末から陳初にかけて涅槃学派を中心とした涅槃研究が漸やく撰山三論学派を中心とするものへ移行して行く過渡的な現象を暗示しているといえるのである。これを承けて吉蔵は、「興皇に至って以来大いに此の典を弘む」と称して、法朗以来涅槃經の研究講説が頗る盛んになったことを示唆しているが、この法朗に始まる三論学派の涅槃研究の盛んな動向については、別の機会にすでに述べた通りである。⁽²⁵⁾

かくて、吉蔵においては遊意一卷の撰述が現存するのみで、公式の記録にも講説・註疏の事実が見当たらないとしても、十分にその涅槃經研究を予想せしめるに足る史的背景を持つていたのであり、別して涅槃經疏二十卷の存在も明らか

である以上、涅槃研究に意を用いたことは明らかであり、涅槃経が吉蔵の思想の基盤となる可能性は十分考えられることである。それが引用典拠の圧倒的多数に連なるものであることは必ずしも矛盾するものではないのである。

三、教判より見た吉蔵の涅槃経観

このように吉蔵における涅槃経研究の背景とその軌跡をたどることが出来るが、では吉蔵自身の涅槃経観はどうであったかといえ、まず中国仏教に特有な教相判釈の立場からいふと、周知のように南地の涅槃学派の間では、△五時教判▽を立てて涅槃経を常住教として漸教五時の最後に位置せしめている。吉蔵はこの五時教判を全く認めず、また頓漸不定という三種教相をも全面的に反駁否定している。たとえば「法華玄論」巻第三に、

宋の道場寺恵観法師は涅槃の序を著わして教に二種有りと明す。一つには頓教即ち華嚴の流なり。二つには漸教謂く五時の説なり。後人更に其れに一を加えて復た無方教有り。三大法師並びに皆之を用う。(大正・三四・三八二・中)

といつて、道場の恵観が頓漸二教と漸教の五時説を立て、後に無方不定教を加えて三種教相となしたことに言及し、梁の三大法師もこれを用いたことを指摘している。そして、「今

大乘経論に依つて其の得失を詳にせん」と称して、

釈論に云く。仏法に二種あり。一には大乘蔵、二には小乗三蔵なり。又云く。仏法には二道あり。一には声聞道、二には菩提薩埵道なり。前には法に約して両を分ち、後には人に就いて二を開く。又釈論に云く。仏滅後迦葉と阿難と三蔵を結集し、文殊と弥勒と亦阿難と摩訶衍蔵を結集す。(三八二・中―下)

と大智度論をあげて大乘蔵と小乗蔵、声聞道と菩薩道の二種の範疇が代表的であることを述べ、ついで、

大経に云く。字に二種あり、一には半字、二には満字なり。声聞の為には半字を説き、菩薩の為には満字を説く。又云く。諸の大衆に凡そ二種あり。一には小乗を求め二には大乘を求む。昔波羅捺に於て声聞の為に小法輪を転じ、今始めて此の拘尸那城に於て諸菩薩の為に大法輪を転ず。(三八二・下)

と涅槃経をあげて第二の経証としている。ついで「法華経」「撰大乘論」「維摩経」と順次に経証をあげて同様の趣旨を述べ、最後に、

是の如き等の処処に、経論には但大小二乗のみを明すが故に、唯二種の法輪のみ有り、応に三教を立つべからず。

と反駁している。慧観が涅槃経の五味の説に基づいて説いた五時教判に、その涅槃経を以て反証するというのも、五味と

五時がそのまま相応しないという見解である。すなわち法華玄論で、

五味と五時とは義相応せず。乃ち証成せんと欲して反って自害と為る。五時中には波若を以て第二時と為す。五味中には波若を第四と為す。曲会して波若は即ち是れ法華と平等の大慧なりと云わんと欲すと雖も、此れは乃ち文を廻らして義に就くものにして所以に非ざるなり。(大正・三四・三八四・上)

と述べている。吉蔵の五時教判に対する批判は、インド伝来の仏教の正統的な立場に基づいて、教相判釈という現象が、中国における經典受容に際しての独自の価値判断の基準であったという歴史的事情を無視したものである。したがって中国的なこの教相判釈の批判の当否は別として、吉蔵における經典価値の基準は、大乘か小乗か、声聞蔵か菩薩蔵か、或いは半字教か満字教かという二種の範疇に基づくものであったということだけは確かである。そこから強いて彼の教判ともいえる「二蔵三輪」の説もまた由来するのである。すなわち「中觀論疏」巻一本に、

釈迦の一化に凡そ三輪あり。一には根本法輪、謂く一乗教なり。二には枝末法輪の教なり。衆生は一を聞くに堪えざるが故に、一仏乘に於て分別して三を説く。三は一従り起るが故に枝末と稱するなり。三には撰末帰本なり。此の三

門は教として収めざるなく理として撰せざることなし。空の万像を含むが如く、海の百川を納むが若し。(大正・四二・八・中)

といて、根本・枝末・撰末帰本の三法輪をもって仏陀の教法のすべてを撰すとするものである。これを詳説したのが「法華遊意」等に見られる

根本法輪とは、仏が初めて成道の花嚴の会に純ら菩薩の為に一因一果の法門を開くを謂う。謂く根本の教なり。但し、薄福鈍根の流は一因一果を開くに堪えざるが故に、一仏乘に於て分別して三を説くを、始末の教えと謂うなり。四十余年三乗の教えを説いて其の心を陶練す。今の法花に至りて始めて彼の三乗を会して一道に帰することを得。即ち撰末帰本の教なり。(大正・三四・六三四・下)

という一文である。この三時教判ともいべき三法輪の説が吉蔵乃至三論学派の教判である。⁽²⁶⁾三時教判そのものは決して特異なものでなく、真諦説の「二教三輪」なるものが円測の「仁王般若經疏」や「解深密經疏」に伝えられているので、⁽²⁷⁾

吉蔵の「二蔵三法輪」はその形式を借りて内容を換骨奪胎したものである。吉蔵が幼時、真諦 (Paramārtha 546~569 在中国) によって命名されている両者の因縁からして、⁽²⁸⁾吉蔵の二蔵三法輪説の源は真諦説にあったことは容易に推察されるところであるが、それはともかくとして、この教判の特徴

は涅槃學派の五時教判の徹底的否定であり、涅槃經の絶対視に對するアンチとして説かれたものである点に存する。すなわち、この二藏三法輪の教判では華嚴經と法華經はそれぞれ根本法輪と撰末歸本法輪に配されてその位置を明示されているが、涅槃經は全くその価値について論及されることがないのである。これは同じく天台が涅槃學派の五時教判を批判しながら、自らも八五時八教の教判を確立し、法華・涅槃を漸教第五時の同じ醍醐味となすのとは対蹠的である。⁽²⁹⁾ 吉藏が教判の上で明らかに涅槃經を無視したことは、第一に前にも述べたように、涅槃經が涅槃學派や成実學派によって當時絶対視せられていたことに対する反撥が主たる動機であるが、単なる牽強付会だけではなかったことは吉藏の教判の基準が大乗か小乗かというインドの大乗經論の正統的な視点を根拠としているからであり、また元來吉藏には、同一の主題をさまざまな角度から検討し表現するという傾向とともに、種々なる価値の一体視という傾向もまた顯著であつて、涅槃經の雪山の一味の藥がその流処に従つて六種の味を生ずるといふ喩は彼の好んで引く所であり、大乗經典は価値的にはすべて同一視していた傾向がある。⁽³¹⁾ したがつて經典相互間の比較をなす場合にも個々のテーマに依じて、たとえば、

法華は三乘を會して漸悟の菩薩の為に説き正しく三乘に對するに、勝鬘は頓悟の菩薩の為に説いて声聞緣覺に對せ

ず、但(一)人に對して説く。此れを異となす。(「大乘玄論」卷第三・大正・四五・四二・下―四三・上)

というように説くのが通例であつて、二智に關して「真空を照らすを實となし、俗有を鑒みるを權となす」のが「小品」の二智であり、「常住を照らすを實となし、無常を鑒みるを權となす」のが「涅槃」の二智であるとか、稟教の機根という尺度からは「般若」や「法華」は利根の人の為に説かれたのに対し、「涅槃」は鈍根の人の為に説かれたのである、⁽³³⁾ というような比較は随処に見られるが、教相判積的な立場で涅槃經を絶対視するということは決してないのである。しかし、天台が涅槃經を法華經と並ぶ最高の位次に擬しながら、結局は法華の説を補うものとして所謂八追説追泯の經とみなし、法華を中心に自己の教學を樹立して行つたのとは違つて、吉藏においてはこの涅槃經が決定的にその般若空觀思想の枠組みの中に取り入れられているのであつて、經典そのものの重用という点では教相判積的な立場とは一変しているのである。引用經典から見た涅槃經の圧倒的多用という現象は取りも直さず彼の經典としての涅槃經尊重の具体的な現われである。

四、中觀論疏における涅槃經引用の特徴

(一)

吉藏は涅槃經遊意の冒頭で、

此の經に就いては南北二本あり。広略不同なり。北方の旧本は或いは三十三或いは三十なる者有るも品は唯だ十三のみ有り。南土の文卷は三十六有り、二十五品有り。その間文義浩博にして豈詳しく写す可けんや。(大正・三八・二三〇・上)

と述べて、涅槃經のテキストについては現在の如く南北二本を承知していたようである。実際に吉藏が研究の対象として用い、中觀論疏等に引用したのはこの中の三十六卷本の「南本涅槃經」(大正・十二・六〇五・No. 375)である。涅槃經は南北二本とも内容は略同じであるが、北涼の曇無讖(三八五—四三三)訳の北本四十卷本を慧嚴(三六三—四四三)、八五—四三三)の南本三十三卷本を慧觀(一四五三)等が謝靈運(三八五—四三三)と共に再治して科文を改め学者の便に資したのが南本三十六卷本で、南地の涅槃學派が専らこれを用い、吉藏もまた江南の伝統に従ったものと思われる。このことは彼の引用文の中に明らかであって、たとえば、前にも引いた涅槃疏卷十二に、

迦葉曰如来言於娑羅雙樹の下は第二に無所得を明す。山中の諸法師、止觀師に涅槃を講ぜんことを請う。師直ちに第

十五卷を取りて此の中の文を唱え、無所得の意を商略して是れ涅槃の正意なることを明せり。(「檢遊集」前出)

という一文中の第十五卷というのは、明らかに南本涅槃經卷第十五梵行品第二十二にある

迦葉菩薩仏に曰して言く。世尊よ。如来先に娑羅雙樹の間に於て、純陀の為に偈を説きたまう。

本有今無 本無今有

三世有法 無有是処

と。是の義如何。(後略)(大正・十二・七〇七・上)

という文中における本有今無偈の釈であり、この同文は北本涅槃經ならば卷第十七梵行品第八之三(大正・十二・四六四・下)である。ただし、この場合正確にいうならば止觀寺僧詮の依用したのが南本涅槃經であるということが判明しただけで、それがそのまま吉藏の依用したテキストも南本であったと断言することはできないが、別に中觀論疏卷第一末に、涅槃の十三卷に、今昔の二法輪、皆小を挙げて大に対すと明かすを以てなり。(大正・四二・一四・上)

とある涅槃經の第十三卷とは、南本卷第十三聖行品下にある善男子、是の諸大衆に復た二種あり。一には小を求め、二には大乘を求む。我昔日波羅捺城に於て諸声聞の為に法輪を転ず。今始めて此の拘尸那城に於て諸菩薩の為に大法輪を転ず。(大正・十二・六八九・下)

という一文を指すものと考えられる。北本の同文は卷第十四聖行品之下（大正・十二・四四七・下）に相当する。吉蔵はこの一文を指して「涅槃經十三卷」と称しているのであるから、明らかに吉蔵は江南の伝統に従って南本を依用したのであり、涅槃經疏二十巻もまた南本涅槃經の註疏である。⁽³⁴⁾したがって、以下に述べる中觀論疏における涅槃經の引用典拠はすべて一応南本によってこれを検索し註記した。

(二)

中觀論疏における涅槃經引用の大きな特徴は泰本教授の指摘するよう⁽³⁵⁾に、要略・取意または何のことわりもなく多数引用する点に見られるが、さらにこれを形式の上では次の三つに分類することができる。

- 一、涅槃經からの引用であることを明確に示している場合。これはさらに、(1)「涅槃經第何巻云」と巻数まで指し示しているもの（一箇所のみ）と、(2)「涅槃經何品云」と品名をあげて引用する場合（二箇所）の他、大部分は(3)「涅槃經云」(4)「涅槃云」(5)「大經云」等、經の正式の呼称や略称・通称を用いている場合と(6)涅槃經の「品名」のみをあげられる場合とに分けられる。

(1) 涅槃經第何巻云という例

ex 以_三涅槃十三卷明_三今昔二法輪皆_三小對_三大

中論疏卷第一末（大正・四二・一四・上）

中觀論疏における涅槃經の引用(一)

cf 善男子、是諸大衆復有二種、一者求_三小乘_三二者求_三大乘_三、我於_三昔日波羅捺城_三為_三諸声聞_三轉_三千法輪_三、今始於_三此抱尸那城_三為_三諸菩薩_三轉_三大法輪_三。

(2) 涅槃經何品云という例

ex 如_三涅槃獅子吼品云_三、一切諸業無_レ有_三定性_三唯有_三愚智_三、愚人則以_レ輕為_レ重、無而成_レ有智者轉_レ重為_レ輕、轉_レ有令_レ無

中論疏卷第八本（大正・四二・一一六・上）

cf 善男子、或有_三重業_三可_レ得_レ作_レ輕。或有_三輕業_三可_レ得_レ作_レ重、非_三一切人_三唯有_三愚智_三、是故当_レ知非_三一切業悉定得_レ果、雖_レ不_三定得_三亦非_レ不_レ得、善男子、一切衆生凡有_三二種_三、一者智人、二者愚人、有智之人以_三智慧力_三、能令_三地獄極重之業現世輕受_三、愚癡之人現世輕業地獄重受

涅槃經卷第二十九（大正・十二・七九五・下）

(3) 涅槃經云の例

ex 如_三涅槃經云_三、或有_レ服_三甘露_三壽命得_三長存_三或有_レ服_三甘露_三傷_レ命而早夭

中論疏卷第一末（大正・四二・一九・中—下）

cf 爾時世尊而說_レ偈言

或有_レ服_三甘露_三傷_レ命而早夭_上

或復服_ニ甘露_一 壽命得_ニ長存_一

涅槃經卷第八(大正・十二・六五〇・上)

(4) 涅槃云の例

ex 涅槃云、二乘之人名_ニ有所得_一也

中論疏 卷第一本(大正・四二・一〇・中)

cf 有所得者名為_ニ声聞辟支仏道_一

涅槃經 卷第十五(大正・十二・七〇六・下)

(5) 大經云の例

ex 大經云、我亦不_レ説_ニ三宝無_レ有_ニ異相_一、但説_ニ常義無_ニ差別_一耳

別_ニ耳_一

中論疏 卷第二末(大正・四二・三・一・中)

cf 善男子、如來不_レ説_ニ仏法衆僧無_ニ差別相_一、唯説_ニ常住清

淨_ニ二法無_ニ差別_一耳

涅槃經 卷第二十三(大正・十二・七五六・下)

(6) 品名のみをあげる例

ex 師子吼云、空中無_レ刺、云何言_レ拔

中論疏 卷第三末(大正・四二・四八・中)

cf 師子吼言、空中無_レ刺、云何言_レ拔

涅槃經 卷第二十七(大正・十二・七八一・上)

二、經云とある場合。これはさらに(1)単に「経云」とある

場合と(2)「経云」とともに涅槃經特有の個有名詞を含む

ものとは分けられる。

(1) 単に経云の例

ex 経云、衆生病有_ニ三種_一、一貪欲病教_ニ不淨觀_一、二瞋恚病

教_ニ慈悲觀_一、三愚癡病教_ニ因縁觀_一

中論疏 卷第一末(大正・四二・十六・下)

cf 知_ニ諸凡夫病有_ニ三種_一、一者貪欲、二者瞋恚、三者愚

癡、貪欲病者教_レ觀_ニ骨相_一、瞋恚病者觀_ニ慈悲相_一、愚癡

病者觀_ニ十二縁相_一

涅槃經 卷第二十三(大正・十二・七五五・中)

(2) 経云の他に涅槃經特有の個有名詞を含む例

ex 如_下阿難度_ニ須跋陀_一事_ニ經云_上

中論疏 卷第一末(大正・四二・十三・中)

cf 須跋陀言、善哉阿難、我今當_レ往_ニ至如來所_一、爾時阿難

与_ニ須跋陀_一還_ニ至_ニ仏所_一、時須跋陀到已、問訊作_ニ如是

言_一

涅槃經 卷第三十六(大正・十二・八五〇・下)

三、「涅槃經云」とも「経云」とも明示してない場合。こ

れはさらに、(1)引用文であることのみ判明しているもの

(2)引用文であることが分り、しかも涅槃經特有の個有名

詞を含むもの(3)必ずしも引用文といえないが、涅槃經の

喩、術語をその中に含むものとは分けられる。

(1) 引用文であることのみ判明して別に手がかりの得られ

ない例。

ex 所以云ニ発心畢竟ニ無別

中論疏 卷第二・末 (大正・四二・三一・上)

cf 爾時迦葉菩薩即於ニ仏前ニ以レ偈讚レ仏

憐ニ愍世間ニ大医王 身及智慧俱寂靜

無我法中有ニ真我ニ 是故敬ニ礼無上尊ニ

発心畢竟ニ不レ別 如レ是ニ一心先心難

涅槃經 卷第三十五 (大正・十二・八三八・上)

(2) 引用文であることが分り、涅槃經特有の個有名詞を含ま

む例。

ex 如ニ先尼ニ計ニ作者是即陰

中論疏 卷第六 (大正・四二・八九・中)

cf 善男子、汝意若謂ニ我是作者、是義不レ然

涅槃經 卷第三十五 (大正・十二・八四三・上)

(3) 必ずしも引用文といえないが涅槃經特有の喩・術語を

含む例。

ex 前禁ニ於常ニ後禁ニ無常ニ、前有ニ断首令、後有ニ舌落之言、

故不レ応レ有レ所ニ取著ニ。

中論疏 卷第七・本 (大正・四二・一〇七・中)

cf. 1 是藥毒害多ニ傷損ニ故、若故服者当レ斬ニ其首ニ

涅槃經 卷第二 (大正・十二・六一八・上)

cf. 2 我今為ニ諸声聞弟子ニ説ニ毘伽羅論、謂如来常存無レ有ニ

變易、若有レ人言ニ如来無常、云何是人不ニ墮落ニ

中觀論疏における涅槃經の引用

涅槃經 卷第五 (大正・十二・六三一・中)

(紙数の都合で、それぞれの場合について一例のみをあげるにとどめたが、他の全用例については南本涅槃經による典拠とともに別の機会にこれを詳論することとしたい。)

五、獅子吼菩薩品と吉蔵の空觀思想

ところで、中觀論疏における多数の涅槃經の引用の中で、吉蔵が最も頻繁にこれを用いたものは何であったか、次にこの点の検討を行なうことによって、引用文から見た涅槃經と吉蔵の思想の特徴を探ってみたい。数ある涅槃經の引用の中で、同一箇所が最も多く引かれているもの二つをあげると次のような文である。すなわち、一つは、

(1) 若言ニ無明因縁ニ諸行、凡夫之人聞已分別生ニ法想、明与ニ無明、愚者謂ニ智者了ニ達其性無ニ、無二之性即是実性

涅槃經卷第八如来性品第十二 (大正・十二・六五一・下) という一文で、これは「明無明愚者謂ニ」の部分だけを引用したものが、

(1) 中觀論疏卷第一本 (大正・四二・九・上)

(2) 〃 卷第二本 (大正・四二・二六・下)

の二箇所、「明与ニ無明ニ愚者謂ニ、智者了ニ達其性無ニ、無二之性即是実性」の全文を引いているものが、

(大正・四二・一六〇・下―一六一・上)

と述べている。このような吉蔵の空観は涅槃經の仏性説に基づくことは明らかであるが、単にこれが南朝の伝統的な仏性常住思想のそのままの継承ではないことは、涅槃經の解釈に關して従来の説と吉蔵の説との違いを見れば明らかである。すなわち涅槃經の宗旨を常住にありとするのが道生(三五五―四三四)以来ほとんどの涅槃師の定説であるが、吉蔵は空観の立場から、

常を明かし、無常を明かすのは因縁仮名字の説であつて、無常の得すべきもなく、亦常の得すべきもなし。

〔涅槃經遊意〕大正・三八・二三二・下)

といつて無所得をもつて經の宗旨となすのである。涅槃經の思想は、經自らが「般若經より出ず」と稱している⁽³⁹⁾ように、空観の基礎づけを待って打ち出された思想である。吉蔵は一方で、南朝仏教が常住思想の強調の余り、先尼外道の見に墮する恐れのあるのに猛省をうながすとともに、反面この無得正観の立場から空性の実践を無執著にありとして有無断常の二見を否定するのである。しかも、有無の二見を否定するという遮遺そのものは「中論」にも見られることであるが、吉蔵にあっては空を見て不空を見ないのは遍悟であるといつて(大正・四二・三・上)、常に有見と無見の否定から究極的な肯定を絶えず予想しているのである。これは全く涅槃經の

立場に基づくものであるが、なかでも般若空観思想との融即を示している「師子吼菩薩品」の思想が、その基調になつていたのである。つまり、師子吼菩薩品によれば、「仏性とは空と不空とを見る第一義空であり、それが「中道に他ならない」のである。(大正・十二・七六七・下―七六八・下)吉蔵はこれを中論疏の中で中道の定義に二度引いている。⁽⁴⁰⁾また同品では「第一義空を名づけて智慧となす」(七六七・下)とも稱しているが、これが具体的には空と不空とを見、明と無明と、常と無常とを見る智者の智であり、十二因縁を觀照する智慧でもある。この第一義空の立場に立つ觀智が仏性であると説くのが師子吼品の仏性論である。吉蔵が中論疏で觀因縁品の因縁を十二因縁と押え(大正・四二・六・上)十二因縁の不生不滅を明かしたのが「中論」の八不であるとし(大正・四二・二九・下)、一方でこの十二因縁の本無生滅を正観する觀智が仏性である(大正・四二・六・中)といつているのは、全く師子吼菩薩品の立場に基づくものである。そこから吉蔵のあの究極における肯定的表現が出てくるのであり、その要となつていゝるものが、觀智という般若波羅蜜の實踐であつて、決して常住の理という概念形式ではない所に、南朝涅槃宗学との間に画すべき一線があつたのである。思想的な依憑として用いられた涅槃經の中でも、師子吼品が中心であつたといふことは、中論疏における全引用文の中で

師子吼品からの引用が断然多いという事実、また吉藏自身が「大乘玄論」の中で、

今時の一師（法朗）毎に涅槃經を以て証と為す。然れども此の一教は処処に皆仏性を明すが故に哀歎品の中の瑠璃珠の喩是れ具足して仏性の事を明し、義乃ち顕然たり、故に一師の引く所の文句は師子吼の文を以て正と為す。

（大正・四五・三七・中）

といていることから明らかにうかがえる所である。後世中唐以降の南宗禅の祖師方に涅槃經の引用が比較的多いことは周知の通りである。禅宗における涅槃經の依用という問題は南方涅槃師の常住思想に対するアンチテーゼとしての一面からのものであるが、しかもその引用の多くは師子吼品であるということは、この品がとくに数ある涅槃經の仏性論の中でも空觀思想との融即を意図した品であったことを思うとき、南宗禅における涅槃經引用の意図を伺うことができるのであり、思想の型としては三論における空觀思想と仏性思想の融即という形式と一種共通のものをそこに見出すことができるのである。

六、結 語

このように、中觀論疏における涅槃經の引用の問題は、単に莊嚴としてそれが引かれたのではなく、彼の思想の本質

にかかわる問題を含んでいることが知られるのである。そして、このことは中国仏教における般若空觀思想の展開を考える場合、涅槃經の思想との融合という形式においてはじめてその大成を吉藏において見たという点で、中国仏教に受容された空觀思想の体質がどういうものであったかということについて、吉藏以後の展開をも含めて改めて重要な示唆を与えているということができよう。

註(1) cf. "Prasannapadā; L. de la Valley poussin" pp. 625—629.

- (2) "Aśtasāhasrikāprajñāpāramitā" (八千頌般若、羅什訳「小品般若」)は般若經の原型を伝えるものとして最近注目研究せられるようになったが(cf.「梵語仏典の諸文献」資料篇)中国・日本では「Pañcaviṃśati-sāhasrikāprajñā pāramitā」(二万五千頌般若・羅什訳「小品般若」)は盛んに依用されたのに比べ、ほとんど利用されていない。(水野「新仏典解題事典」七十九頁梶芳光運の項参照。)
- (3) 引用回数については泰本融氏「中觀論疏解題」(「国訳一切經」和漢撰述26・論疏部六)及び同氏「吉藏における中觀思想の形態」——基礎的研究(一)——(「東洋文化研究所紀要」第四十二冊、昭和四十一年十一月)参照。
- (4) 「月燈三昧經」十卷(大正・十五・六二〇No. 639)は「入於大悲大方等大集說經」または「大方等大集月燈經」ともい、原曲名を「Samādhirāja-Pradīpasūtra」という。那連

提耶舍(五一七—五八九)訳で、天保八(五五七)年初訳である。費長房の「歴代三宝紀」卷廿九に「月燈三昧經十一卷天保八年於天平寺出」(大正・四九・八七・中)とあるのが経録に記載された最初で、現存蔵経では十卷(高麗本による)であるが、宋・元・明三本蔵経はいずれも十一卷である。「仏書解説辞典」第二卷・七七頁・参照)したがって訳出年代から推して吉蔵(五四九—六二三)の時代には殆んど流布していなかったと思われる。

(5) もっともブラサンナバダーの索引には小乗の“Mahā Parinibbāna Sutta” (大般涅槃經) が数回引用せられている。(Poussin 校訂本六二七頁参照)

(6) 泰本融氏前掲書、及び論文。(註)(3)参照。

(7) 安井広濟氏「中觀の二諦説と三論の二諦説」(「中觀思想の研究」三八四—三九一頁)参照。

(8) 拙稿「中国仏教史における不空の概念」(「印・仏・研」18—2)参照。

(9) 横超慧日氏「法華義疏解題」(「国訳一切經」和漢撰述3・經疏部3)参照。

(10) 桜部文鏡氏「勝鬘宝窟解題」(「国訳一切經」和漢撰述11・經疏部11)四—六頁参照。

(11) この三人を「梁三大法師」と称する例は「統高僧伝」卷第十五末に「時有三大法師雲曼蔵者、方駕当途復称僧傑」(大正・五〇・五四八・中)とあり、また陳慧達「肇論疏」に「第二梁時三大法師並云、八地為法身位七地未合」(卅・

統・二・乙・二三・四)などとあることから明らかである。また涅槃經研究の事実については「高僧伝」中の各伝中に詳しく、また布施浩岳氏「涅槃宗の研究」二一七—二二二頁に詳論されている。

(11) 慧遠には「涅槃經義記」十卷(大正・三七・六一三—No.1764)があり、智顛には涅槃經の註疏はないが、著作の随処にこれを引用し、弟子の章安灌頂(五六二—六三三)に「涅槃經疏」三十三卷(大正・三八・四一—No.1767)があり、その教学の中心である「五時八教判」の原型は涅槃經に基づくことは周知の通りである。

(13) 横超慧日氏「中国仏教の研究」二九〇頁—三二二頁参照。

(14) 泰本融氏・前掲論文の「結語」参照。

(15) 日本三論学者の代表的註釈書中に散見する吉蔵の「涅槃經疏」の逸文については、これを集録再構成した拙稿「吉蔵著涅槃經疏逸文の研究」(「南都仏教」二十七号)参照。

(16) 「勝鬘宝窟」(大正・三三・一—No.1744)には卷首に「楊州慧日道場沙門吉蔵撰」とある。この時代の著作であることの明記の見られるのは他に「三論玄義」(大正・四五・一—No.1852)の「恵(慧)日道場沙門吉蔵奉命撰」だけであり、これを信用する限り、略この前後の作品であろう。

(17) 珍海「三論名教抄」卷第十(大正・七〇・七九二・下)に引用されたもの。

(18) 同書に「如別記者指余文也、余文者何可尋之。法花玄一云、問、六通之中三輪是何等通耶、答、就六通義、三是

示現、三非示現、他心通即他心輪、如意通謂神通輪、漏尽通謂說法輪、問、余三通何以不名示現、答他心等三能令衆生即事信驗故名示現、天眼等三則不能示故不名示現、又法花普門品疏解觀音名德、凡有十對、玄論二十雙義其中第十六雙引神通示現、(後略)」とあり、夫々「法華玄論」卷一(大正・三四・三六五・下)と「法華義疏」卷第十二(大正・三四・六二四・上)の二文をあげて、これが別記の相当文であることを明示している。

(19) 現存の「法華玄論」(大正・三四・三六一 No. 1721)は十

卷、「法華義疏」(大正・三四・四五一 No. 1720)は十二卷で、計二十二卷となり巻数が合致しないが「統略」には「凡二十卷」とあり概数をいっただものか、或いは横超博士のいわれるように(国訳一切経「法華義疏解題」六頁)現今の「義疏」十二巻が元は十巻になっていたものであろう。

(20) 横超慧日氏前記「法華義疏解題」参照。

(21) 吉蔵は「維摩經」については「浄名玄論」八卷(大正・三八・八五三 No. 1780)「維摩經義疏」六卷(大正・三八・九〇八 No. 1781)「維摩經略疏」五卷(卍・続・一・一・二九・二)の三部の註疏を著わしているが、そのいずれもが長安日嚴寺時代の作品である。詳しくは拙稿「吉祥大師吉蔵の基礎的研究」(印・仏・研)14-2)参照。

(22) 「法華論疏」巻上に「余講三經文疏三種、一用閩河叡朗旧宗、二依竜樹提婆通經大意三採此論綱領」(卍・続・一・一・七四・二・一四九・左上)とあり、第二の竜樹、

提婆に依って經の大意を通ずというのがこれに当たると考えられる。

(23) 秦本氏・前記「中觀論疏解題」十二頁参照。

(24) 「涅槃經疏」巻第十に「山中師既不講此經、興皇何得講之、明興皇師傍中処処口語決涅槃大意略尽、而余法師不知此諮問、故興皇云、我無同学也」(「中觀論疏記」巻第三末大正・六五・九八・上)とあるように、法朗の涅槃經講經の知識は、僧詮に秘かに諮問したことによって得られたと吉蔵は伝えている。このことから推しても僧詮が涅槃經について一家の見識を有していたことが知られる。

(25) 拙稿「三論学派における涅槃研究の濫觴」(印・仏・研)16-2)参照。

(26) 法蔵「探玄記」(大正・三五・一一・中)李通玄「新華嚴經論」(大正・三六・七三四・下)にこの「二教三法輪」が三論学派の教判であることを説いているから、後世これが三論独自の論であるとみなしていたことが知られる。

(27) 円測撰「仁王般若經疏」(大正・三三・三七六・中)同「解深密經疏」(卍・続・一・一・三四・五・四一二・左下―四一三・右下)参照。

(28) 「統高僧伝」巻第十一吉蔵伝に「年任孩童、父引之見於真諦、仍乞詔之、諦問其所懷、可為吉蔵、因遂名也」(大正・五〇・五一三・下)とあるを参照。

(29) 「法華玄義」巻第十(大正・三四・八〇三・中―下、八〇九・上)参照。

30 南本「涅槃經」卷第八、如来性品に「復次善男子、譬如丙雪山有二味菓、名曰菓味（中略）王既没已、其後是菓或醋或逸或甜或苦或淡如是一味隨其流処、有種種異」（大正・六四九・中）とあるを参照。

31 「大乘玄論」卷第四に「諸大乘經通為顯道、道既無二、教豈異哉、但入有多門故、諸部差別」（大正・四五・五七・上）とあるを参照。

32 「大乘玄論」卷第四（大正・四五・五六・下）参照。

33 同 同（大正・四五・五八・上）参照。

34 南本「涅槃經」と吉藏撰「涅槃經疏」の組織科文との対校は拙稿「吉藏著涅槃經疏逸文の研究」（「南都仏教」第二十七号）の解題で一覽表に附したので、これを参照されたい。

35 註33参照。

36 後世の禪家の間でも「明無明無二」の説は「煩惱菩提不二」の説とならんで、「曹溪大師別伝」などで説かれ、「涅槃經」の代表的な思想と考えられている。柳田聖山氏「初期禪宗史書の研究」二四〇頁参照。

37 吉藏「二諦義」巻下で二諦相即の義を論ずる場合、直接の典拠となったのは、一つはこの涅槃經の「世諦者即第一義諦」である。（大正・四五・一〇・四・下）。拙稿「吉藏二諦章の思想と構造——二諦の相即をめぐる——」（駒沢大学仏教学部研究紀要）第二十八号）参照。

38 布施浩岳氏「涅槃宗の研究」五九〇頁参照。

39 南本「涅槃經」卷第十三聖行品・下に「善男子從仏出生十

二部經、從十二部經出修多羅、從修多羅出方等經、從三方等經出般若波羅蜜、從般若波羅蜜出大涅槃」（大正・十二・六九一・上）とあるを参照。
40 「中觀論疏」卷第二末（大正・四二・三一・上）と卷第三本（大正・四二・三四・中）